プロデューサー
PRODUCER

CM 制作の機会を生み出し、

企画に最適なスタッフと共に

映像を作り上げます。

角谷淳（かくや・あつし）

株式会社 AOI Pro.
プロデューサー

1982 年生まれ。東京工芸大学卒。株式会社ゲネプロに入社し、CM の制作部に配属。2013 年、AOI Pro. に入社。アシスタントプロデューサーを経て、2017 年よりプロデューサー。2019 年にプロデュースした映画『リッちゃん、健ちゃんの夏。』が公開された。

「映像で生きていく」将来を決めた 1 週間

AOI Pro. のプロデューサー、角谷淳氏が、映像の道に進もうと決めたのは高校卒業後、予備校に通っていたときだ。

「自分は人生で何をしたいのかを考える 1 週間を作って、本を読んだりしながら、自分は何に興味があるのか、思いをめぐらせました。そこで改めて気づいたのは、映像が好きだということ。その時、映像にかかわることを一生の仕事にしようと決めました」

映像を好きになったきっかけは、是枝裕和監督の映画『ワンダフルライフ』を見たこと。「こんなにかっこいい映画があるのかと思いました。作品の中に大好きな一コマがあって。自分もそうした場面をつくる側になりたいと思いました」

東京工芸大学へ進むと、自ら映像制作サークルを立ち上げた。部員が増えてくると、チーム分けをして、数カ月に 1 度、つくった映画を上映する会も開催。映像づくりにのめり込んでいった。

就職活動は、映像制作をビジネスとして成立させている広告関連会社に軸足をおいて実施。だが希望していた演出部での採用は、1 年近く就職活動を続けても思うようにいかなかった。

「卒業目前の 2 月になって、いよいよ方向転換せざるを得ないというところまで追い込まれました。それでもなんとか映像に携わりたいと思ったとき、制作部という選択肢もあると気づき、志望の枠を広げたところ、すぐに決まりました」

映像の方向性を左右する監督選び

現在、AOI Pro. に所属する角谷氏は就職して以来ずっと制作部での仕事を続けている。「AOI Pro. の制作部では、プロダクションマネージャーとしてだいたい 6 年から 8 年経験を積んだ人がプロデューサーになります。プロデューサーの役割は、広告主や広告会社から仕事を受注し、CM 制作の機会をつくること。制作部ではその案件を具体化し映像にしていきます」

CM 制作の仕事を受注すると、商品のコンセプトをもとに、クライアントや広告会社と協議しながら、CM でどう描くのかをまとめた企画コンテをつくる。企画にふさわしいディレクター（監督）を選定するのもプロデューサーの大事な仕事だ。カメラマンや美術担当などのスタッフと共に CM の構成を練り、撮影へ。その後、編集作業を経て、CM が納品される。プロデューサーは、予算やスケジュール、スタッフを管理しながら、CM 制作の全ての工程にかかわる。担当する案件は人によってまちまち、プロデューサーのなかには同時に 10 本近く担当することもあるという。

「私は 3 ～ 4 本くらいを並行で担当しています。抱える本数はその人の関与度にもよりますが、若手の間は、ひとつの作品に深く入り込んでつくり上げていく傾向があるように感じます」

角谷氏がプロデューサーの仕事として特に重要だと考えているのは、監督選びだ。「その作品がどういう方向へ振れるのか、監督によって大きく変わります。これまでどんな作品をつくってきたのかはもちろん見ていますが、人間性やコスト、さまざまな要素から最適と考えられる人を選びます。単に著名な監督を起用すれば良いというわけではなくて、若手でもこの人を、と指名する場合もあります」

これまで築いた人脈が生き、CM の仕事の受注が決まったり、スタッフィングにつながったりすることもある。「あのときにあの人と出会っていなければ、この仕事は生まれていなかったとか、ちょっとした挨拶がきっかけで新しい人脈が広がった、ということは多々あります。人とのつながりは大切です。若手時代に一緒に仕事をして“この人とは気が合うな”と感じた同世代のスタッフと、将来的に仕事をするようになるようなこともあります」

撮った映像をつないで 1 本にまとめる瞬間が好き

角谷氏が仕事をしていて好きな瞬間は編集作業。それも仮編集のときだと言う。

「撮りためてきた映像が、初めて一本にまとまる瞬間が好きです。つないだ映像を私たちが最初に見ます。これがたまらなく楽しい。編集の工程は、主に監督と編集スタッフが進めていきますが、つい私も口を出してしまいます。若手の監督だとアドバイスを求めてくる人もいて、その反応も面白く感じています」

これまでで記憶に残る仕事のひとつは、ダイハツ工業の「ウェイク」の CM。2018 年までの約 4 年間担当し、その間にプロダクションマネージャーからアシスタントプロデューサーになり、さらにプロデューサーへと役割が変化。自身の成長とともに過ごした作品であることと、一緒に働

最近の仕事 RECENT WORK

映画『リッちゃん、健ちゃんの夏。』
AOI Pro. の大森歩氏が監督を務めた、短編の恋愛映画。監督と映画の話をしたことがきっかけで、本作でのプロデューサーに角谷氏が起用された。

制約の多い渋谷での早朝ロケで、生きた街を撮るために、エキストラを募集。地道に声をかけ、早朝撮影にもかかわらず最終的に 80 人近く集まりました。

くスタッフたちとも良いチームワークが築けたことも、良い経験となった。

「放映後の反応で、自分が携わった案件が世の中に影響を与えていると実感できることも、この仕事の醍醐味です」

仕事では、大変だと感じることも多いが、常に楽しむことを意識していると角谷氏は話す。

「仕事を頑張ったその先に、楽しいことが待っていると考えるようにしています。実は高校時代にサッカーをしていて、努力して上手くなっていったことで、“楽しい”を得るために頑張ることの価値を知りました。このことは、今も私が日々仕事をしていく上での考え方の軸になっています」

角谷氏の好きな言葉は「人間万事塞翁が馬」。映像の制作現場では、予期せぬことも起こる。だが、それが転じて、いい未来につながるかもしれない。そういう気持ちを持っているからこそ、仕事をやり遂げることができるという。

「好き」に本気で向き合うことで未来を開くことができる

「映像好きであることは、周囲にも認知してもらっているので“角谷に聞けば何か意見がもらえるのでは”と思って話しかけてもらえることが、私の一番の強みだと感じています」

後輩に限らず、先輩や上司からも、意見を求められるのは、角谷氏が根っからの「映像好き」であるため。これから広告界を目指す学生へも「何か一つでも本気でやりたいと思ったものを追求してほしい」とエールを送る。「例えばアイドルが好きで、会ってみたいというようなことでもいいと思います。好きという気持ちを仕事のモチベーションに変えられるようになると、仕事で辛い局面に来ても乗り越えることができます」

プロデューサーに向いているのは、人が好きで、すぐに話しかけにいったりできる、友達が多い人ではないかと言う。

「ちょっとした会食での出会いが仕事を広げることもある、人との関係性が大きく影響する仕事です。なので、面白い、好きだなと感じたら、積極的に話しかけられる人はいい仕事ができるチャンスも多くなると思います」

角谷氏は、2019年短編映画にプロデューサーとしてかかわり「小さな夢が叶いました」と話す。予備校時代の1週間に、映像で生きていくことを決め、幼少期からの「好き」を貫き、努力を続けてきたことがプロデューサーとしての道を開いた。もう一つの好きな言葉「継続は力なり」を自身も体現している。

1週間のスケジュール
WEEKLY SCHEDULE

MON 月曜日	A案件打合せ / 見積作成
TUE 火曜日	B案件オーディション
WED 水曜日	A案件撮影
THU 木曜日	会食
FRI 金曜日	C案件編集 /B案件打合せ
SAT 土曜日	オフ

1日のスケジュール
DAILY SCHEDULE

6:00	
7:00	
8:00	
9:00	起床
10:00	
11:00	出社 / メール確認
12:00	社内打合せ
13:00	ランチ
14:00	打合せ資料準備
15:00	広告会社との打合せ
16:00	
17:00	スタッフとの打合せ
18:00	編集作業
19:00	
20:00	見積作成
21:00	会食
22:00	
23:00	帰宅
24:00	
1:00	
2:00	就寝
3:00	
4:00	
5:00	

オフの過ごし方 DAY OFF

映画を見たり、ショッピングをして過ごすことが多いです。旅行も好きで、写真は大阪や京都に行った時に撮ったものです。最近はゴルフを練習中。ゴルフで新しい人とのつながりも生まれています。